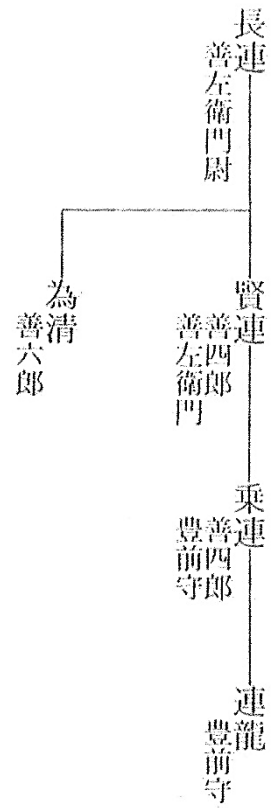




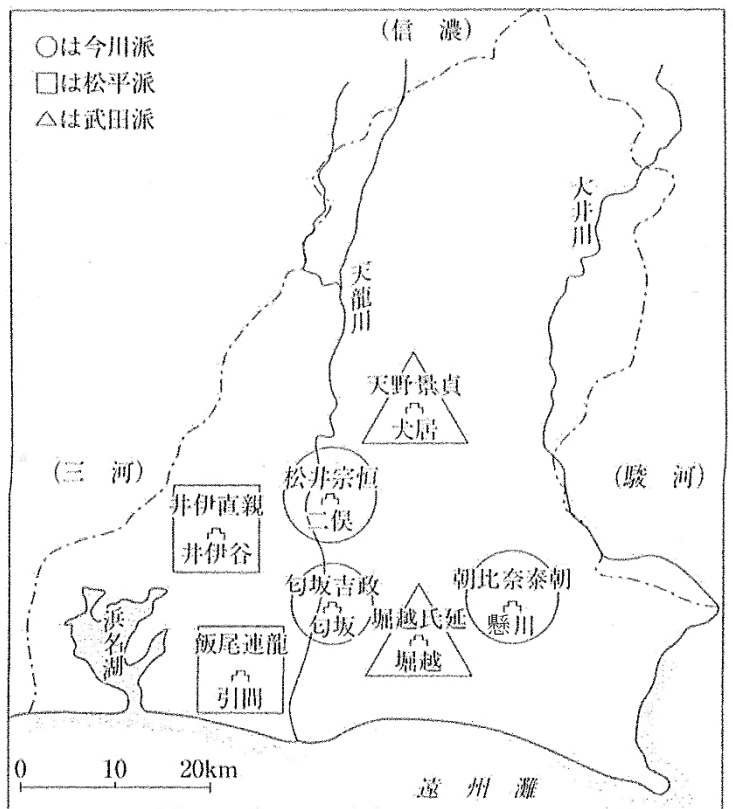
「遠州念劇」とは

一、遠州引間ノ城主飯尾豊前守ハ駿州今川ノ先鋒(鋒)トシテ、尾州織田軍勢ト所々ニテ合戦、然ニ永禄三年(五月)月脱十九日、義元、尾州桶狭間ニテ討死ノ後、氏真、亡父ノ弔合戦之心掛モ無之、朝夕酒宴遊興ニ長ラル、故、権現様、永禄四年ヨリ信長公ト御和睦被成候、自是先ハ今川ト一味遠州引間ノ城主飯尾豊前守・同国井伊谷ノ城主井伊肥後守・同国嵩山ノ城主奥村修理ヲ始、大方氏真ヲ叛キ、信長公及権現様江内通仕候、此由氏真聞及、永禄五年三月八井伊谷、同年四月八引間、同七月八嵩山ハ落去、引間ノ城ニテハ、寄手ノ大将新野左馬助討死、城内ニモ、飯尾同心渥美・森川・内田等ノ歴々討死仕候得共、猶堅固ニ守ニ依テ、氏真、調略ヲ以テ、致和談候、此以後永禄七甲子、氏真三州江発向、権現様ト所々ニテ攻合、同国一ノ宮ヨリ人数ヲ引取被申候刻、飯尾ハ権現様江御味方ノ躰相見候ニツキ、氏真ヨリ遠州二俣ノ城主松井左衛門初強八ト、中候哉、豊前守姉婿ナルニヨリ渠ヲ媒トシテ縁ニ取クミ、駿府江呼寄、永禄八年極月廿日、駿府二ノ丸飯尾屋敷江押詰、被誅之、然共引間城ハ豊前守家臣江間安芸守・同加賀守持固候故、翌年二月、権現様より御慰之御書被下候由、

「浜松御在城記」



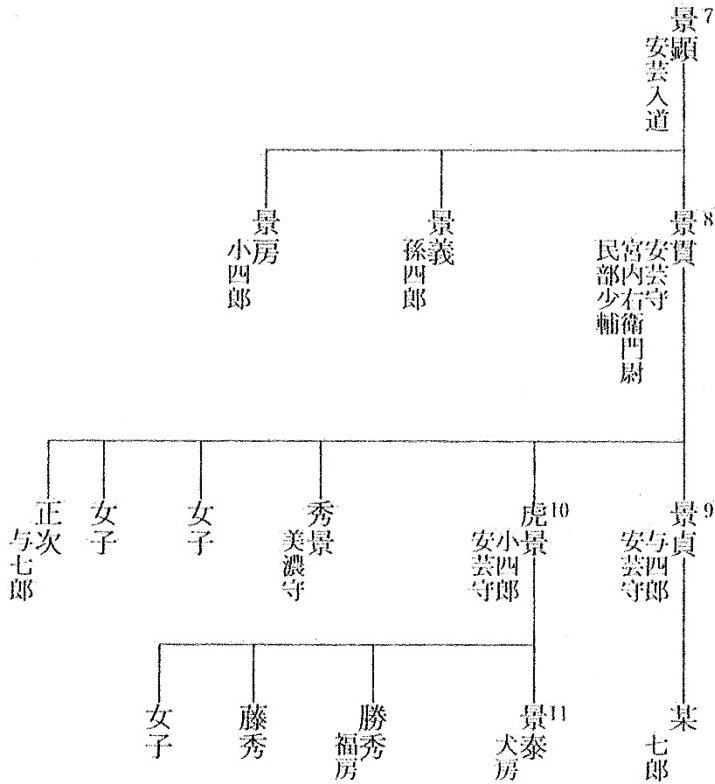
飯尾氏略系図



「遠州念劇」時の遠江の状況  
小和田哲男著『東海の戦国史』

武田信玄からも誘いの手  
堀越の堀越氏延の場合

犬居城の天野景貞の場合



天野氏略系図

武田信玄ハ、「堀越六郎ハ今川家ノ一門ニテ了俊家ナレハ、忽キ謀反ヲ起シ、駿河ヘ攻入玉ヘ、此方ヨリ手ヲ合せ、人数遣シ、両方ヨリ攻寄、御館ヲ其方ニ遣シ、今川ノ家督を可遣」ト偽テスカシケレハ、堀越思慮ナキ人ニテ、引馬ノ飯尾豊前守ヲ語ヒ、永禄六年ニ逆心ヲ起シ、近辺ノ地特ヲ勸ケル、此由聞ヘシカハ、氏真公不日ニ出張シ玉ヒ、飯尾方ヘハ新野左馬助・朝比奈備中守ヲ差遣シ、堀越六郎ヲハ向坂六右衛門、糠谷但馬守・大原肥前守・三浦左衛門尉ヲ指向攻ラルル、兩人共ニ防戦不叶自害シテ果ケレハ、残党悉打取城ニ火ヲカケ焼去ル、然共味方新野左馬助此一戦ニ討死ス、

「今川家譜」

八月十七日、駿河国葛山氏元、甲斐国への塩留に  
よって没収した塩の納入を、芹沢玄蕃允らに命  
ずる。

三五〇 葛山氏元朱印状 (折紙) 芹沢文書  
○御殿場市萩原

過書錢之儀、当[ ]殊外上之由申条、三人前急度可納  
所、塩荷被留候条、只今まで上候荷物之儀可納所、為

其小者秋若遣者也、仍如件、

永禄十年卯

八月十七日

鈴木若狭守 [殿カ]

武藤新左衛門尉殿

芹沢玄蕃允殿

2. 家康と信玄が手を結んで今川氏を滅ぼす

信玄が今川氏真と断交したのはいつか

永禄 10 年 (1567) 8 月 17 日付

「塩留」の文書

信玄による今川方部将への寝返り工作

「今川氏の大將分二十一人、連々信玄に謀せられ、或は駿河を一国給はん、遠州を半国とらせんと偽しを誠なりと悦び、瀬名・朝比奈等を我先にと、甲州へ降る」(「松平記」)

3. 信玄の駿河への侵攻〔永禄11年(1568)〕

信玄が躑躅ヶ崎館を出陣 12月6日

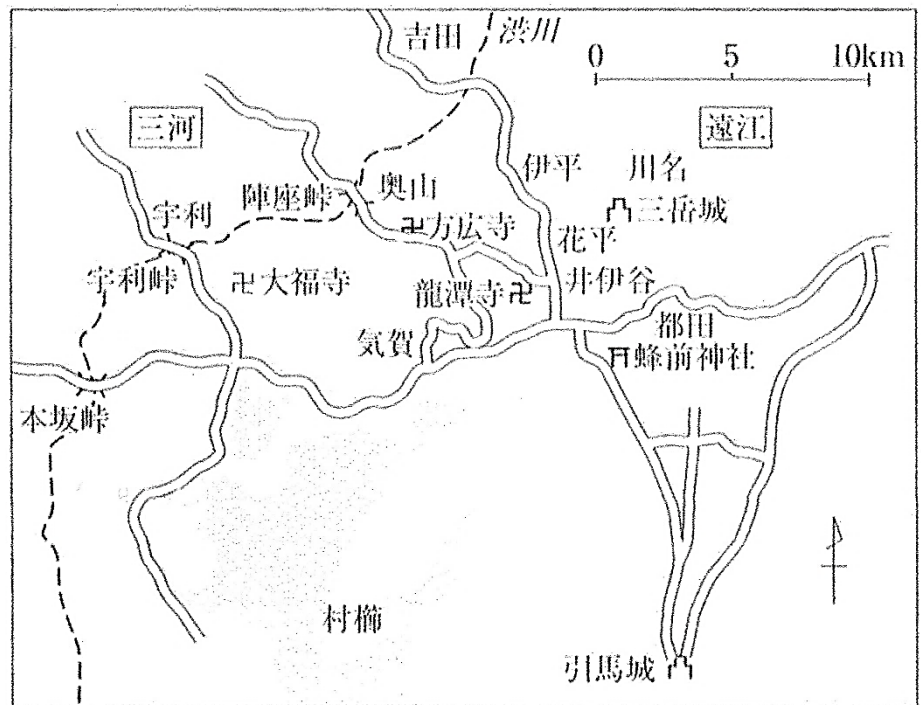
甲斐・駿河国境を越える 12月12日

駿府今川館攻め 12月13日

今川氏真は掛川城へ逃げる

4. 家康の遠江への侵攻〔永禄11年(1568)〕

家康も三河・遠江国境を越える 12月13日



三河・遠江国境付近図

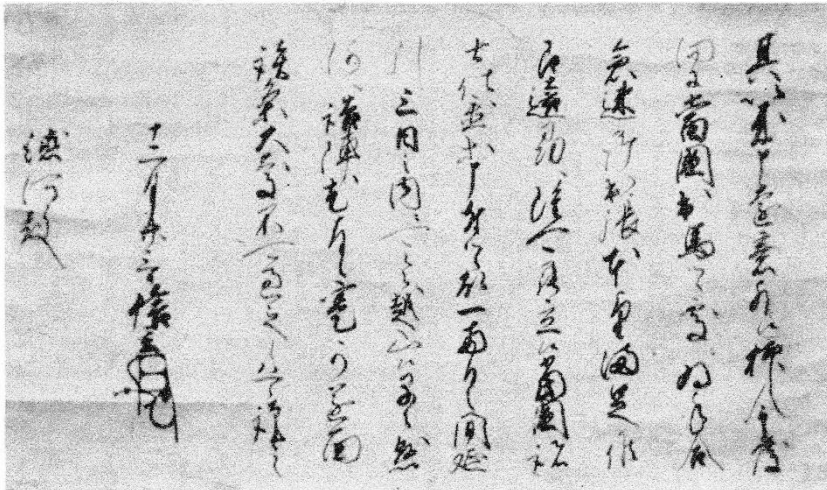
小和田哲男著『東海の戦国史』

戦わずに降伏する今川方部将

高天神城主 小笠原氏助

馬伏塚城主 小笠原氏興

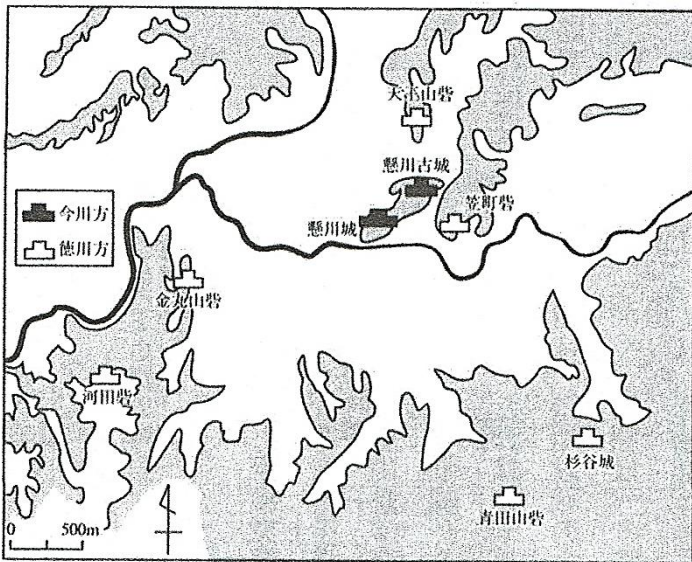
信玄に掛川城攻めを催促される家康



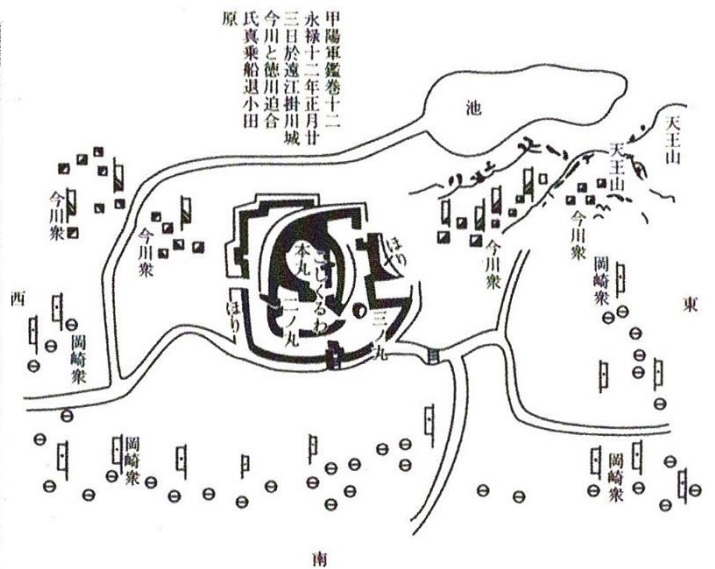
武田信玄書状 惠林寺文書(塩山市)

其以来申遠意外候、抑今度  
 向レ于二当国一 出馬候之處ニ、為二手合一  
 急速御出張本望満足候、  
 即遠州へ雖下可罷立一候上、当国諸  
 士仕置等申付候之故、一兩日之間延  
 引、三日之内ニ可レ令越山一候、早々懸  
 河へ詰陣尤存候、寔可レ遂ニ面  
 談一條、大慶不レ可レ過レ之候、恐々謹言  
 十二月廿三日 信玄(花押)  
 徳河殿

力攻めでは落とせずに講和開城



懸川城を囲む家康方の砦



『遠江国風土記伝』所収 懸川城の戦い布陣図

小和田哲男著作集 第三卷『武将たちと駿河・遠江』

おわりに